

2019 年度 事業報告書



公益財団法人 知床財団

目 次

公 益 事 業

公 1：普及対策系事業（独自事業）

I. 野生生物との共存のための啓発業務	1
1. 地域向け環境教育	1
2. 学習教材開発・運用業務	2
II. 国立公園利用者サービス業務	2
1. ビジター向けインフォメーション・環境教育業務	2
2. 知床自然センター内外刷新業務	3
3. ルサフィールドハウス周辺整備構想検討業務	5
III. 情報発信・賛助会員拡大業務	5
1. 地域向け情報発信	5
2. 一般向け情報発信	5
3. ホームページ等インターネットを活用した広報の強化	6
IV. 賛助会員運営業務	6
1. 会報誌の発行	6
2. 賛助会員の管理	6
3. 寄付、賛助会員拡大推進	6
V. 人材育成業務	7
1. ボランティア活動推進業務	7
2. 人材育成・就業体験受入業務	7

公 2：施設管理系事業（受託事業）

I. 知床自然センター等管理運営業務	8
II. 羅臼ビジターセンター管理運営業務	8
III. ルサフィールドハウス管理運営業務	8

公3：調査研究系事業

I.	独自調査研究事業.....	9
1.	エゾシカ個体群の動態に関する調査業務	9
2.	ヒグマの生態等に関する調査業務	9
3.	知床の暮らしと生き物を守る電気柵・ゴミステーション等普及業務.....	9
4.	知床半島におけるヒグマ捕獲情報の収集業務	10
5.	希少鳥類などの長期モニタリング業務	10
6.	海生哺乳類モニタリング業務	10
7.	水域における生物群集モニタリング業務	10
8.	フレペの滝遊歩道における植生調査	10
9.	学術的な交流と成果公表に関する業務	11
II.	斜里町及び羅臼町におけるヒグマ・自然環境管理対策事業（受託事業）	12
1.	ヒグマ対策業務	12
2.	自然環境管理対策業務	13
III.	野生生物管理事業（受託事業）	14
1.	知床国立公園・国指定知床鳥獣保護区における利用の適正化と野生動物との共生を推進する業務	14
2.	エゾシカ生息密度操作関係業務	14
3.	網走市ヒグマ・エゾシカ調査業務	14
IV.	遺産地域調査事業（受託事業）	15
1.	エゾシカ航空カウント調査業務	15
2.	環境研究総合推進費による調査業務	15
V.	科学委員会等運営事業（受託事業）	15
VI.	自動車規制管理運営事業（受託事業）	15
VII.	知床エコツーリズム総合推進事業（独自事業）	16
1.	適正利用・エコツーリズム検討会への参画	16
2.	交通システムに関する研究と提案	16

3. 知床五湖地区でのキャンペーンと広報	16
VIII. 知床五湖関連業務（受託事業）	16
IX. 住民講座補助業務（受託事業）	17

公4：森林再生系事業

I. しれとこ 100 平方メートル運動地における森林再生業務（受託事業）	18
1. 森林再生推進業務	18
II. しれとこ 100 平方メートル運動に関わる普及推進及び調査事業（独自事業）	19
1. 森・川・人プロジェクト	19

収 益 事 業

収1：収益事業

I. 販売・有償貸出業務	21
--------------------	----

他1：その他の事業

I. JBN業務（受託事業）	22
----------------------	----

法 人 会 計

法1：財団法人管理運営事業

I. 財団法人管理運営業務.....	23
--------------------	----

公 益 事 業

公 1：普及対策系事業（独自事業）

I. 野生生物との共存のための啓発業務

1. 地域向け環境教育

野生生物との共存への理解を推進する教育

知床ウトロ学校の1年生から6年生を対象としたクマ授業を実施しました。2018年度に初めて実施を試みた8年生による1・2年生対象のクマ授業も引き続き同じ形で授業を行いました。今年度は初めてウトロへき地保育所へ職員が出向き、職員と保護者向けにヒグマレクチャーを行いました。さらに斜里中学校1年生向けのクマ授業も今年度初めて実施しました。

知床財団が行うヒグマ対策活動に対し、住民の理解と協力を得ることを目的に、知床財団職員とウトロ・斜里町の住民が直接意見交換をする「クマ端会議」を今年度もウトロ、斜里市街地それぞれで各1回ずつ開催しました。さらに今年度は羅臼でも「クマ端会議」を初開催しました。

羅臼町では、幼小中高一貫教育のカリキュラムのもと、幼稚園と小学3年生、小学5年生、中学1年生、中学3年生、高校2年生の全生徒を対象に、計9回のヒグマ授業をそれぞれの学校で実施しました。

標津中学校においてもヒグマ対策スタッフが赴き、1-2年生を対象に有償でヒグマ学習を実施しました。

地域の自然への関心を高める教育

斜里町、羅臼町それぞれにおいて今年も総合的な学習の時間などの枠で、知床の自然や世界自然遺産、知床に暮らす生き物、100平方メートル運動など学習対応を行いました。

7月に斜里小学校3年生を対象に、野外学習前のレクチャーを知床自然センターにて実施したほか、同7月にしれとこ100平方メートル運動の学習対応として4年生を対象に、座学と現地実習を組み合わせた授業を実施しました。また、知床ウトロ学校8年生の職業体験実習を受け入れ、今年度は保護管理部の仕事を体験してもらいました。

総合的な学習の一環として、10月には知床ウトロ学校1年生を対象に、身近な自然や昆虫について学習する授業を同じく野外で実施しました。また同学校2年生を対象に、生活科の「えがおのひみつたんけんたい」という授業に対応し、地域の自然や施設を学ぶサポートを行いました。

斜里中学校2年生のキャリア学習では、学校に直接出向き、知床財団がどのような職業

か学んでもらう授業に協力しました。

羅臼町においては、知床未来中学校 2 年生、羅臼高等学校 2 年生の職業体験学習を例年通り羅臼ビジターセンターで受け入れました。

羅臼町公民館、環境省と共に羅臼町内の小学生を対象にして毎年実施している知床キッズ（羅臼町ふるさと体験教室）は、今年度も 5 月から 2 月までの間に計 10 回の講座を企画しました。今年度で 5 年目となるウトロの愛護少年団との交流事業も引き続き企画、実施しました。プログラムは 6 月に予定していた知床岬でのゴミ拾い活動は海域の状況を判断し、相泊からクズレハマまでの海岸清掃に切り替えて実施しました。ウトロのチャシコツ崎における浅瀬の生き物学習は 7 月に実施し、羅臼、ウトロそれぞれの子供たちのよい交流の場となりました。

羅臼町教育委員会、羅臼町公民館、子ども会育成協議会が主催する「羅臼町ふるさと少年探険隊」に、今年も職員 1 名が運営スタッフとして協力しました。

2. 学習教材開発・運用業務

今年度、ヒグマ学習教材トランクキット 1 号機の貸出実績は 9 件、2 号機の貸出実績は 6 件となりました。貸出し出張期間以外では、職員がヒグマ授業や、広報イベント、知床自然センター内での観光客向けレクチャー、町民への普及活動などに活用しています。

また、海獣版のトランクキットは、羅臼ビジターセンターでのミニレクチャーなどの場で職員が活用したほか、昨年度同様 1 月に札幌で開催されたイベント『世界自然遺産・知床の日「しれとこ食の宴」』でも活用し大変好評でした。

Ⅱ. 国立公園利用者サービス業務

1. ビジター向けインフォメーション・環境教育業務

知床自然センター

前年度に引き続き知床自然センターでのインフォメーションおよび環境教育事業は、次項のリニューアルアクションプランとして一体的に実施しました。

羅臼ビジターセンター

来館者に対し、自由に展示物を見ていただくだけではわからないストーリー性や奥行きのある自然解説を行うため、ミニレクチャーを実施しています。今年度は 7 月 8 月の繁忙期に計 22 回実施し、253 人の方にご参加いただきました。レクチャーの内容は、オジロワシ・オオワシに関することやヒグマの話、また羅臼の岩についてなど、バラエティー豊かな内容で実施しました。

また、11 月の町民向けイベントビジフェス 2019 に合わせてビジターセンターカフェも実施しました。お菓子やパン、ホットコーヒーなどを準備し、いつもとは違う雰囲気のビジターセンターとなりました。

冬期間の公園利用の促進を目的として、ビジターセンター周辺の環境をより楽しんでもいただくため、ビジターセンターの裏手から間歇泉やキャンプ場をめぐるスノーシューコースの運用を行いました。利用者にはアンケートも実施し、コースの改善等に役立てています。

ルサフィールドハウス

知床半島中央部地区及び先端部地区利用者に対し、立ち入る際の留意事項と禁止事項等についてレクチャーを実施しました。一般来館者へは施設展示を活用しながら、数多くの鯨類が利用している羅臼の海の豊かさなどについてお話しするとともに、フィールドハウスの2階から観察できる鯨類のことなどを解説しました。

知床五湖フィールドハウス

知床五湖利用調整地区の指定認定機関として4月から11月まで職員が常駐しました。定期的な遊歩道の巡視を行い、現地のコンディションや自然情報等の情報を収集し、SNS等での情報発信や展示物の作成に活用しました。また、8月上旬にはヒグマの活動が続いたことにより遊歩道の利用が度々制限されたことから、歩道の利用状況といった現地のリアルタイム情報の細やかな発信に努めました。増加傾向にあるインバウンド利用者への対応として、展示物や掲示物を英語表記で作成したほか、窓口での利用案内の英語対応も積極的に行いました。ヒグマ活動期には、知床ガイド協議会と協力しガイドツアー情報や当日のツアー参加希望者への案内サービスを継続しています。

2. 知床自然センター内外刷新業務

知床自然センターは2015年度の大規模改修工事を経て、2016年4月にリニューアルオープンし、2019年度には第2期工事が実施されました。今年度は、駐車場の再整備等、園地を対象とした外溝工事が行われ、普通車の駐車台数は約50台増の187台収容可能となりました。また、大型映像ホールで31年間上映し続けた「四季知床」の後継作品の制作が2年間かけて行われついに新たな2作品が完成しました。こうした各種リニューアル事業の進捗を踏まえ、ソフト面を含めた施設の利活用を進めるためのリニューアルアクションプランを引き続き実施しました。

①インフォメーションカウンターの運用

フィールド情報の受発信と外国人利用者への対応を核としたインフォメーション機能の充実を図りました。リアルタイム情報の受発信の強化のため、twitter、Instagram等のSNSの運用を継続したほか、知床国立公園内の施設、観光船、遊歩道等の開閉・運用等の状況が一覧できるポータルサイト「知床情報玉手箱」を運用し、館内サイネージに取り入れました。また、100平方メートル運動地の公開コースである「森づくりの道」の情報提供にも取り組みました。また、夏期繁忙期にはシャトルバスの発券サービスを行い、チケットの発券と共に情報提供を行う仕組み作りを構築しました。

②レクチャーコーナーの活用と普及啓発事業の実施

レクチャーコーナーにおいて、定時レクチャーに取り組みました。知床の自然の魅力

や財団の取り組みを分かりやすく伝える「知床財団 スタッフトーク！」は4月20日から10月19日までの期間、毎日1回実施し1,058名の参加がありました。実施時には、併せて財団のPRも行い、募金活動をしました。館内に設置した2カ所の募金箱と併せ、今年度は総計963,710円の募金を集めることができました。

③映像ホール「KINETOKO」の運用刷新

今年度は四季知床の後継作品の制作2年目となり、2作品「知床の冒険」と「THE LIMIT」が完成しました。知床財団の知見を魅力的な作品作りに活かすため、撮影やプロモーションに協力しました。公開まで効果的にプロモーションを進めるため、館内に「THE LIMIT」の内容をアレンジした参加型の展示を設置しました。また、上映機器に関しては、4K、5.1chサラウンドシステムに対応した機材に一新され、事前に組み込んだスケジュールで自動上映される運用になり、現場作業が大幅に効率化されました。

④常設展示・企画展示室の立ち上げと運用

館内展示について、従来の展示物の整理を行い、テーマや導線に沿った再配置や外国語表記に取り組みました。柱展示は従前通りの取り組みを継続しました。企画展示室においては、年3回の企画展を実施したほか、ミニギャラリーでの写真展も継続し、6回の写真展を行いました。

⑤屋外スペースの整備と導線の確立

自然センターの外構工事のあり方について斜里町との協議を継続しました。本年度は、駐車場を中心とした外構について着手されたことから、工事の内容の詳細を随時現場ですり合わせたほか、次年度の第2期外構工事に向けた提案を継続して行いました。

⑥広報・記念イベントの実施

ホロベツ地区の園地・施設の今後のあり方を象徴するイベントとして、昨年度に続き第2回知床アウトドアフィルムフェスを実施しました。具体的には、①カナダのバンフ国立公園で毎年開催されている山岳映画祭のワールドツアーを映像ホールで開催 ②2020年春公開予定の新映像公開に向けたプロモーション ③ホロベツ園地を活用した野外アクティビティ ④地元ガイドと連携した屋外プログラム(開拓小屋コース散策、知床峠サイクリング) ⑤アウトドアブランドを中心とした販売企画 ⑥地場産の食材を活かしたフードメニューの提供等を実施しました。会期中の来場者数は2,000名強となり、昨年度の来場者数を上回る多くの来場者で賑わいました。

3月には「四季知床」の最終上映と新作映像のプロモーションを兼ねたイベントを実施予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、残念ながら中止としました。知床自然センターの展示やイベント、最新の取り組みを紹介する「知床自然センターだより」の発行を継続しました。ウトロの宿泊施設および観光関係施設(全27施設)に配布し、宿泊者への情報提供に役立てていただいています。

3. ルサフィールドハウス周辺整備構想検討業務

ルサフィールドハウスの知名度向上と幅広い層の方々に利用いただくことを目的として、「ルサ・カフェ」を実施しました。今年度は7月26日～7月28日の3日間と、9月11日～9月16日の6日間に実施し、期間中合わせて1,582名の来館がありました。ルサフィールドハウスを多くの人に知ってもらい、先端部利用に関する周知につなげていきたいと企画し始めたルサカフェは、地域内外の皆様から愛される事業となったように感じます。

また、ルサフィールドハウス裏に防風防鹿柵を設置し、自生している稚樹を育てていこうという事業では、今年度事業に周知を図る看板を作成しました。また、この活動を周知するための町民イベントを10月14日に実施しました。秋の晴天の中、少しずつ大きくなってきた木を見ながら、大きさを測る子供たちの目がキラキラとしていました。

Ⅲ. 情報発信・賛助会員拡大業務

1. 地域向け情報発信

知床財団の活動に対する理解と協力を得るために、地元やそのほかの地域に向けて知床財団の活動紹介を行っています。地元の斜里・羅臼両町民向けには、2009年度より知床の旬の自然情報や当財団の活動・イベント情報をお知らせする「知床財団だより」を発行しています。今年度は2ヶ月に1回、計6回発行し、斜里・羅臼両町の広報誌に折り込みました（発行部数：斜里町5,000部、羅臼町1,500部）。

2. 一般向け情報発信

会報誌SEEDSを活用して、観光客を対象とした知床財団のPRや賛助会員獲得に向けた広報を展開しています。2011年の夏より、斜里・羅臼両町の宿泊施設にご協力いただき、SEEDSを町内の旅館やホテルなどの宿泊施設に置かせていただいているほか、賛助会員募集パンフレットを地元の旅館のロビーなどに置かせていただいています。また、SEEDSバックナンバーを販売物のラインナップに取り入れ、賛助会員入会への導入を試みています。

協定先の旭川市旭山動物園では引き続き「しれとこシカ絵巻」をエゾシカエリアに設置いただいています。また、園内図書館には賛助会員募集のパンフレットやSEEDSのバックナンバーファイルが設置されており、知床財団活動のPR、賛助会員獲得にむけた広報にご協力いただいています。

北海道みらい大志として活動している元日本ハムファイターズのマスコットB☆Bにご協力いただき、ヒグマと出会った時にしてはいけないことをわかりやすく解説する2分ほどの普及啓発動画を作成しました。この動画は知床財団のYouTubeサイトにアップし、各所に拡散しています。今後も様々な場所で活用していく予定です。

3. ホームページ等インターネットを活用した広報の強化

知床財団の活動に対する理解と支援の輪を広げるため、ホームページでの情報発信を継続して行っています。SNS（Social Network Service）のひとつ Facebook を引き続き広報媒体として活用しました。知床財団の活動ブログを Facebook でも取り上げるなどして知床財団のホームページへの誘導も図りました。イベント開催時には、ローコストで広報できる Facebook のメリットを活用し、メインの広報媒体として大いに活用しました。

IV. 賛助会員運営業務

1. 会報誌の発行

賛助会員向けの会報誌である知床自然情報紙「SEEDS」を4回発行し、会員の皆様や関係機関の方に発送しました。

2. 賛助会員の管理

今年度の新規の入会状況は、個人年会員 107 名（前年度 117 名）、個人終身会員 13 名（前年度 17 名）、法人年会員 7 団体（前年度 7 団体）、法人特別年会員 4 団体（前年度 6 団体）でした。2020 年 3 月 31 日現在の会員数は、個人年会員 720 名（前年度 700 名）、個人終身会員 1,084 名（前年度 1,076 名）、法人年会員 54 団体（前年度 49 団体）、法人特別年会員 21 団体（前年度 17 団体）、計 1,879 件（前年度 1,842 件）でした。

3. 寄付、賛助会員拡大推進

知床財団の活動をひろく一般の方へ PR し寄附拡大へとつなげるため、札幌近郊で開催されている北海道キャンピングフェアに参加しました。本イベントの参加は 2016 年度から実施し、今年度 4 回目の参加でした。また、斜里町の産業祭り、羅臼町の漁火まつりに出展し、地元住民に対し知床財団が行なっている活動内容の普及に努めました。

また、知床の日には札幌のホテルで開催された『世界自然遺産・知床の日「しれとこ食の宴」』というイベントに2年連続で参加し、知床の自然について簡単なトークを実施し、知床財団の認知度向上に努めました。

今年度、個人寄付としてお寄せいただいた金額は 4,458 千円（前年度 5,066 千円）となりました。法人寄付は 12,018 千円（前年度 7,407 千円）の寄付をいただきました。

知床自然センター・羅臼ビジターセンターの館内展示や知床財団ホームページでは、賛助会員募集や寄付の呼びかけ、寄付のお礼の掲載などに力を入れました。

地元企業における法人会員拡大を図るため、10 年プロジェクトの説明を含めた営業活動を斜里町、羅臼町内それぞれにおいて実施しました。

V. 人材育成業務

1. ボランティア活動推進業務

2019 度末でのボランティア登録者数は 228 名、その内の 37 名の皆さんが「100 平方メートル運動の森・トラスト」の現場での森づくりや羅臼ビジターセンターでの掲示物を作成する作業などに参加してくださいました。年齢層は 10 代から 70 代までと幅広く、道内のみならず遠くは関東や関西からも駆けつけていただきました。今年度、総活動日数は 48 日間、のべ参加人数は 97 人日となりました。

2. 人材育成・就業体験受入業務

環境教育や調査研究、公園管理の現場で活躍する人材の教育、育成のため、インターンシップ（就業体験）の受け入れを行いました。今年度は、宿泊施設が使えない期間があるなどの理由から、夏期のための募集とし、7 教育機関より 8 名の受け入れを実施しました。

公 2：施設管理系事業（受託事業）

I. 知床自然センター等管理運営業務

知床自然センター及び周辺施設の維持管理、映像ホールの運営と料金徴収等の業務を行いました。今年度の知床自然センター入館者数は 256,027 人で前年度比 117%となり、昨年度の 20 万人超えに続き順調な伸びとなりました。一方、映像ホール入館者数は 15,619 人（前年度比 88%）となり伸び悩みました。

そのほか、知床自然教育研修所の維持管理を行いました。今年度は、外部研究者やボランティア活動参加者を中心に 796 人泊の利用があり、344,200 円を施設利用料金として徴収しました。

また、10 月から大々的にリニューアル工事が始まり、工事にかかる現場での定期的な打合せに参加し、各種備品の決定やその配置等の提案を行いました。

II. 羅臼ビジターセンター管理運営業務

羅臼ビジターセンターの来館者数は 48,996 名で前年度比は 107%となり、過去最多の来館があった昨年度をさらに上回りました。知床国立公園内の羅臼町側の主要な利用拠点（羅臼湖、羅臼岳、熊越えの滝、羅臼温泉園地等）の自然情報、利用状況や野生動物の生息状況等を収集する巡視を積極的に実施し、カウンタースタッフ自らが現地で得た情報を館内での情報提供に活用しました。また、カウンターでの情報提供のほかに自然観察会を 4 回、特別展示を 4 回開催し、利用者の方々に普段とは違うビジターセンターを楽しんでいただきました。このほか、ビジターセンターに隣接する間歇泉の噴出時刻を予測し、来館者に提供しました。

羅臼研究支援センターでは、施設の維持管理のほか受付や協力金徴収を行い、外部研究者などのべ 5 泊の利用がありました。今年度は、浄化槽施設の修繕のため受入れができない期間があったり、新型コロナウイルス感染拡大の影響でキャンセルが出るなど、利用は伸び悩みました。

III. ルサフィールドハウス管理運営業務

ルサフィールドハウスは今年度も開館期間は 5 月から 10 月の 6 ヶ月間となりました。今年度の来館者数は 9,383 人で前年度比は 103%、開館以来最多の来館があった昨年度よりも、さらに多くの来館者数となりました。ルサフィールドハウスでは、知床半島先端部地区へ立ち入る利用者に対して、ルールを含めた最新情報や留意点等についてのレクチャーを実施しています。今年度のレクチャーは 58 件、81 名に実施しました。

公 3：調査研究系事業

I. 独自調査研究事業

1. エゾシカ個体群の動態に関する調査業務

知床半島内の重要なエゾシカ越冬地の一つとなっており、林野庁のエゾシカ捕獲事業や一部で一般狩猟が実施されている斜里町真鯉地区において、国道上からのエゾシカ日中カウントを冬期間に計 5 回実施しました。調査日は原則として可猟期間外（休猟期間内）に設定しました。シカの確認頭数は 3 月上旬が最多で 75 頭でした。減少傾向だった最大確認頭数は、2018 年度に一旦増加に転じましたが、2019 年度は再び減少しました。

ルシャ地区において 2014 年および 2016 年に生体捕獲して GPS 首輪を装着した計 14 頭のメスジカについて、環境省事業終了後の追跡調査を実施しました。首輪の脱落や死亡する個体があり、3 月末時点で正常に稼働している首輪は 5 台となりました。

2. ヒグマの生態等に関する調査業務

対策活動時の外見による個体識別精度を向上させるため、ヒグマ 2 頭について麻酔銃による組織片採取（ダートバイオプシー）を行ない、遺伝子分析による結果を得ました。斜里町ルシャ地区を利用するヒグマを、目視と遺伝子分析（分析試料はヘアトラップにより採取した体毛、麻酔銃ダートバイオプシーによる皮膚組織片、回収した新鮮クマ糞など）によって個体識別し、個体間の血縁関係やルシャ地区の外への移動分散状況などを引き続き調査しました（以上、北大獣医学部との共同）。これらは 2019 年度については環境研究総合推進費のプロジェクト（2019～2021 年度）の一部として実施しました。

有害捕獲等で得られたヒグマの頭骨 55 個体分（斜里 29・羅臼 13・標津 4・清里 4・大空 3・津別 1・網走 1）の標本作製しました。

3. 知床の暮らしと生き物を守る電気柵・ゴミステーション等普及業務

ヒグマが出没してもすぐに駆けつけることができない知床岬地区の文吉湾に、ヒグマを近づけないための電気柵を設置しました。

羅臼町や斜里町において、ヒグマによる被害防止を目的として、簡易電気柵の無償貸し出しを実施しました。貸出件数は 5 件でした

ヒグマが中のゴミを荒らすことのできない堅牢性と仕組みを備えたゴミステーション「とれんべア」を 3 基ウトロ市街地に設置しました。

羅臼町では、2011 年から 5 年間にわたりダイキン工業株式会社様からの寄付を受けた羅臼町が順次電気柵の設置を進めました。知床財団はこれら電気柵の設置を羅臼町からの業務委託を受け実施してきました。前年度に引き続き、ダイキン工業株式会社様からの当財

団への寄付金事業として電気柵の設置、維持管理および撤収を実施しました。

4. 知床半島におけるヒグマ捕獲情報の収集業務

科学的な野生動物管理の根幹となる捕獲情報の把握を、「知床半島ヒグマ管理計画」の対象地域である斜里、羅臼および標津の3町において進め、計45頭について捕獲情報とサンプルの収集を行いました。

5. 希少鳥類などの長期モニタリング業務

知床のオジロワシの繁殖状況に関わる調査員によって構成されている「オジロワシ長期モニタリンググループ」の事務局を引き続き担い、情報の集約と会議運営を行いました。会議は12月3日に斜里町内で開催しました。知床財団が調査担当となっている営巣木については、当年の営巣の有無や雛数等について情報収集しました。また、冬期の観光船による餌まき量に関する情報収集ととりまとめを、観光船事業者の協力を得てひきつづき実施しました。さらに、シマフクロウ、オオタカおよびクマゲラを対象とした「希少鳥類確認記録」の様式と入力システムを作成し、試験運用を開始しました。

6. 海生哺乳類モニタリング業務

冬期にトドの来遊海域となっている羅臼町から標津町北部の沿岸において、陸上の定点からのドローン（無人航空機）による調査を継続しました。沿岸の遊泳群を上空から撮影し、群れに含まれている標識個体の確認に努めました。また、2006-2018年度に収集した標識個体の再目視データと捕殺データを基に、来遊数の推定を試みています。さらに、北海道区水産研究所や稚内水産試験場が実施しているトドの解体・サンプリングの一部をサポートしました。

7. 水域における生物群集モニタリング業務

羅臼町の深層水汲み上げ施設で、前年度に引き続き各種生物を収集しました。また、地元漁業者やダイバーにより採集された魚類の提供を受け、標本としました。標本には、大変珍しい種が多数含まれていました。さらに、深層水の水温データを過去十数年にわたりとりまとめ、分析を行い学会で発表しました。

8. フレペの滝遊歩道における植生調査

2014年から独自事業として取り組んでいたフレペの滝遊歩道での草本の開花調査をこのたび記録としてまとめ、知床博物館研究報告第42集に掲載いただきました。報告では、1980年から国によって単発的に実施されていた植生調査での確認種全ても含め、ひとつのリストにまとめました。また、今回確認された種については可能な限り標本採取に努め、その標本は知床博物館に収蔵しました。

9. 学術的な交流と成果公表に関する業務

学会口頭発表

○下鶴倫人, 白根ゆり (北大), 山中正実, 中西将尚, 石名坂豪, 葛西真輔, 能勢峰, 白柳正隆 (知床財団), 神保美渚 (北大), 釣賀一二三, 間野勉 (道総研), 坪田敏男 (北大). 人に馴れた母グマの子は駆除されやすいのか? 知床国立公園に生息するヒグマの人為的捕殺率に影響を与える要因. 日本哺乳類学会 2019 年度大会 中央大学 (東京都文京区) 2019 年 9 月

○敷田麻実 (北陸先端大), 能勢峰 (知床財団). 観光における自然資源の文化資源化のプロセスの分析と課題. 文化経済学会 2019 年度研究大会 名城大学 (名古屋市)

○野別貴博 (知床財団), 山石秀樹・桜庭千尋 (羅臼町産業創生課), 竹田和人 (羅臼漁業協同組合). 羅臼深層水の水温について~2007 年以降の季節・年変化の特徴~. 海洋深層水利用学会 2019 年度大会 鹿児島大学 (鹿児島市) 2019 年 10 月

学会ポスター発表

○白根ゆり (北大), 山中正実, 中西将尚, 石名坂豪 (知床財団), 神保美渚, 佐鹿万里子, 坪田敏男, 下鶴倫人 (北大). 夏期の食物環境の変動がヒグマの栄養状態に与える影響の解明. 日本哺乳類学会 2019 年度大会 中央大学 (東京都文京区) 2019 年 9 月

○山中正実 (知床財団), 下鶴倫人, 白根ゆり (北大), 清成真由, 中西将尚, 石名坂豪, 宇野裕之 (道総研), 神保美渚 (北大), 葛西真輔, 能勢峰, 梅村佳寛. 知床半島におけるエゾシカ新生子の死亡に与えるヒグマの影響の検討. 日本哺乳類学会 2019 年度大会 中央大学 (東京都文京区) 2019 年 9 月

学術誌

野別貴博・山崎友資 (2020) 北海道東部に位置する国後島及び択捉島で確認された貝類. 日本貝類学会研究連絡誌 50 (1): 80-96.

野別貴博・川南拓丸・山崎友資 (2020) 北海道の海洋深層水取水施設から採取された貝類. 日本貝類学会研究連絡誌 50 (1): 97-105.

Michito Shimozuru, Yuri Shirane, Mina Jumbo, Masami Yamanaka, Masanao Nakanishi, Tsuyoshi Isinazaka, Shinsuke Kasai, Takane Nose, Yasushi Fujimoto, Hifumi Tsuruga, Tsutomu Mano, Toshio Tsubota (2020) Male reproductive input, breeding tenure, and turnover in high-density brown bear populations on the Shiretoko Peninsula, Hokkaido, Japan. Canadian Journal of Zoology 98: 175 - 185.

Shirane, Yuri, Shimozuru, Michito, Yamanaka, Masami, Tsuruga, Hifumi, Nakanishi, Masanao, Ishinazaka, Tsuyoshi, Nose, Takane, Kasai, Shinsuke, Shirayanagi, Masataka, Masuda, Yasushi, Fujimoto, Yasushi, Mano, Tsutomu, Sashika, Mariko, Tsubota, Toshio (2019) Sex-biased dispersal and inbreeding avoidance in Hokkaido brown bears. Journal of Mammalogy 100

(4): 1317 - 1326.

Shimozuru M, Shirane Y, Tsuruga H, Yamanaka M, Nakanishi M, Ishinazaka T, Kasai S, Nose T, Masuda Y, Fujimoto Y, Mano T, Tsubota T (2019) Incidence of Multiple Paternity and Inbreeding in High-Density Brown Bear Populations on the Shiretoko Peninsula, Hokkaido, Japan. The Journal of heredity 110 (3): 321 - 331.

佐々木瑞希・石名坂豪・能勢峰・浅川満彦・中尾稔 (2019) 北海道斜里町のヒグマ腸管より検出された日本海裂頭条虫. 日本野生動物医学会誌 24(3) : 123-126.

紀要・報告書・商業誌

片山 綾・田中 優子・野別 貴博・内田 暁友 (2020) フレペの滝遊歩道周辺の植物リスト. 知床博物館研究報告 42: 1-10.

能勢 峰・野別 貴博 (2020) 斜里町におけるヒグマの頭蓋骨のサイズおよび成長. 知床博物館研究報告 42: 19-28.

葛西真輔 (2019) 現場が考える折り合いのつけ方. グリーンパワー12月号 : 8-9

葛西真輔 (2019) 鳥獣対策のカギは地域密着. グリーンパワー11月号 : 8-9

葛西真輔 (2019) 鳥獣管理における知床財団の役割. グリーンパワー10月号 : 8-9

知床ゼミ

外部研究者や職員を発表者とした勉強会を計3回開催しました。知床財団職員や関係機関等を含め、のべ81名の参加がありました。

Ⅱ. 斜里町及び羅臼町におけるヒグマ・自然環境管理対策事業（受託事業）

1. ヒグマ対策業務

斜里町

昨年度のヒグマ目撃件数は970件、対策活動が519件でした。2015年以降、最も少ない目撃件数でした。ウトロ国設キャンプ場近くの国指定鳥獣保護区において、6月と7月に1頭ずつヒグマの有害捕獲がありました。知床五湖でのヒグマ目撃件数は、2年連続過去最多を更新し300件となりました。利用調整地区制度と登録引率者の導入から9年が経過し、五湖園地内では人を恐れないヒグマの出没が増えている状況にあります。岩尾別川河口を見下ろす道道の急カーブ連続区間や岩尾別橋付近では、ヒグマ目当ての観光客やカメラマンなどによる渋滞が頻繁に発生しました。それに伴い、降車してヒグマに接近して観

察しようとする利用者の対応に苦慮しました。幌別川の河口では、釣り人による自主的な釣り場管理が継続して行われており、知床財団も協力しました。斜里町内におけるヒグマの人為的要因による死亡数（技術者育成+有害駆除+狩猟）は29頭でした。そのうち24頭の捕獲原因が農作物への加害でした。

羅臼町

今年度のヒグマ目撃件数は340件、対策活動は268件で、どちらも統計を取り始めてから2番目に多い件数となりました。7月から8月にかけて、飼い犬がヒグマに襲撃される事件が3件発生しました。また、水産加工場や一般家庭から排出される生ゴミにヒグマが誘引される事例も発生しました。水産加工場における電気柵の導入やヒグマが住宅に近寄りにくい環境にするための草刈りを地域ぐるみのヒグマ対策活動として実施しましたが、参加人数は少なく、十分とは言えない状況となっています。海獣類の死体漂着も多く、ヒグマが誘引されるケースも確認されました。羅臼町内における人為的要因（有害捕獲+狩猟）によるヒグマの死亡数は13頭で、すべて有害捕獲でした。捕獲要因は住宅地への接近が多く、このうち2頭は、生ゴミに誘引されたことが原因でした。

2. 自然環境管理対策業務

斜里町

ゴミの不法投棄は21件あり、多くは食品の包装や容器などでした。これらのゴミに野生動物が餌付いた痕跡は確認されませんでした。観光客による野生動物への餌やり行為が1件確認されました。

サケ・マスの遡上シーズンには、釣り人に対してゴミや魚の管理を呼びかける注意看板を、幌別川河口などに例年どおり設置しました。なお、昨年度まで幌別川河口の左岸に設置していた、魚の内蔵回収用の「とれんべア」については、幌別の釣りを守る会からの要望により、今年は設置しないことになりました。その代わりに、ウトロ国設キャンプ場の日帰り利用（有料）で魚を捌くように釣り人を誘導することとなりました。

野生鳥獣死体の処理件数は43件、傷病鳥獣への対応は12件でした。エゾシカのライトカウント調査は、春期と秋期に各5回行いました。また、ウトロ市街地柵内におけるエゾシカの捕獲を春期と冬期に実施した結果、春期で1頭捕獲がありました。冬期では、捕獲がありませんでした。

羅臼町

町内で実施した計19回のパトロールでは、生ゴミ等の不法投棄への対応が6件ありました。また、食料や生ゴミを野外に放置していた釣り利用者に対して指導を行った事例がありました。

有害鳥獣捕獲の対象であるエゾシカを含む傷病野生鳥獣の対応は42件ありました。このうち、交通事故や敷地内への侵入防止のために設置された漁網に絡まって負傷したシカへの対応は4件でした。希少鳥類への対応はオジロワシ5件、オオワシ2件の計7件ありました。今年度から新たに業務に加えられた野生鳥獣の死体回収は28件あり、海獣類の漂

着死体回収補助は 8 件ありました。その他、エゾシカのライトカウント調査は、春期と秋期に各 5 回行いました。

Ⅲ. 野生生物管理事業（受託事業）

1. 知床国立公園・国指定知床鳥獣保護区における利用の適正化と野生動物との共生を推進する業務

知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区内において、ヒグマを含む野生動物と人との軋轢を取り払うためにパトロールを実施しました。パトロールの実施中に、利用者の不適切な行動が確認された場合には、啓発・指導を行いました。確認された利用者による不適切な行動は、ヒグマの出没に伴う渋滞やヒグマ出没時の降車等であり、計 113 件ありました。また、利用拠点の各施設においてヒグマの出没状況に応じた情報周知等も行いました。その他、傷病鳥獣の保護対応が 1 件、死亡鳥獣の回収対応が 33 件ありました。

2. エゾシカ生息密度操作関係業務

今年度も春期および冬期の一大事業として遺産地域内外のエゾシカ捕獲に取り組みました。岩尾別大型仕切柵を含めて囲いわなを 3 基、箱わなを 7 基、くくりわなを約 70 基稼働させ、流し猟式シャープシューティング（道路を閉鎖しての銃捕獲）を 2 ヶ所、誘引（待伏せ）狙撃を 4 ヶ所、巻き狩りを 2 ヶ所で行ったほか、知床岬ではくくりわなや待伏せ狙撃、忍び猟による捕獲も行いました。3 月末までに囲いわなで 13 頭（岩尾別大型仕切柵：5 頭、オシンコシン：1 頭、春苺古丹：7 頭）、箱わなで 10 頭（幌別：8 頭、春苺古丹：2 頭）、くくりわなで 84 頭（幌別-岩尾別：19 頭、ルサ-相泊 21 頭、ウトロ東：7 頭、弁財崎：7 頭、オシンコシン：8 頭、春苺古丹：22 頭）、シャープシューティングで 36 頭（春 幌別-岩尾別：9 頭、ルサ-相泊：18 頭、冬 ルサ-相泊：9 頭）、誘引（待伏せ）狙撃で 21 頭（岩尾別：18 頭、オペケブ：2 頭、遠音別：1 頭）、さらに知床岬で 6 頭（春 4 頭、冬 2 頭）の、計 170 頭を捕獲しました。

3. 網走市ヒグマ・エゾシカ調査業務

近年ヒグマの出没件数が増加している網走市で、ヒグマの生息実態を調査する業務を行いました（受託 2 年目）。ヒグマ出没地点の現地調査、自動撮影カメラ調査、糞分析を実施した他に、網走市民を対象にした講座（児童向け・一般向け）も開催しました。また、11 月初旬に網走市内の 4 ルートで、エゾシカのライトカウント調査を計 3 回実施しました（3 年目）。

IV. 遺産地域調査事業（受託事業）

1. エゾシカ航空カウント調査業務

知床半島の世界遺産地域内限定でエゾシカの航空カウント調査（ヘリカウント）を実施しました。調査区 10 区画で 122 群 700 頭のエゾシカを発見しました。主要な越冬地 4 地区である知床岬地区、ルシャ地区、幌別-岩尾別地区、ルサ-相泊地区のうち、捕獲を行っているルシャ地区以外におけるエゾシカのカウント数の増減は、幌別-岩尾別地区及び知床岬地区で減少しました。一方で、ルサ-相泊地区では増加している結果となりました。

2. 環境研究総合推進費による調査業務

環境省の環境研究総合推進費による 3 年間のプロジェクト研究（課題番号 4-1905 遺産価値向上に向けた知床半島における大型哺乳類の保全管理手法の開発）に、北海道立総合研究機構（道総研）や北海道大学と共に取り組みました（1 年目）。知床半島のヒグマの個体数推定のための大規模ヘアトラップ調査、半島全域でのヒグマ糞の収集、糞分析、ミズナラの結実量調査、エゾシカの麻酔銃捕獲による電波発信機付き首輪・耳標の装着、標識ジカの生存確認など、多岐にわたる項目の調査を実施しました。

V. 科学委員会等運営事業（受託事業）

知床世界自然遺産地域を適切に管理するために、科学的な見地からの行政への助言が科学委員会会議やその付属会議によって行われています。知床財団は科学委員会本体会議（8/19 斜里町、2/20 札幌市）とエゾシカ・ヒグマワーキンググループ会議（6/26-27 羅臼町、12/3-4 釧路市）の運営事務局として、日程調整、会場準備、資料作成、議事録作成を担いました。また、各会議後には地元向けニュースレターを作成、配布するとともに、前年度（平成 29 年度）における遺産地域の管理状況や出来事などを取りまとめた「知床白書」を作成しました。

VI. 自動車規制管理運営事業（受託事業）

カムイワッカ地区で行われているマイカー規制の現地連絡調整業務を自動車利用適正化対策連絡協議会から受託し、知床自然センターを拠点に、運営の円滑化のためにバス会社や各地に配置された警備員や巡視員との連絡調整、利用状況の調査や利用者への情報提供、ヒグマ出没時の連絡整理、負傷者への対応などを行いました。今年度は悪天候や道路閉鎖も少なく、シャトルバスの利用者は 11,482 人（昨年比 107%）となり安定的な利用が実現

できました。

VII. 知床エコツーリズム総合推進事業（独自事業）

1. 適正利用・エコツーリズム検討会への参画

よりよい公園利用のあり方を目指し様々な協議や試行事業に参加しています。適正利用・エコツーリズム検討会議（世界遺産科学委、利用適正・エコツーリズム WG と地域連絡会議、利用適正・エコツーリズム部会の合同会議）では、地域提案型の利用のあり方やルール作りの仕組みが確立されつつあり、知床財団もこうした取り組みに参画しています。同会議において 2015 年に知床財団が提案した「外国人旅行者向け情報発信の強化」部会の成果である、①知床地域の交通情報、観光情報、フィールド情報をリアルタイムに受発信する「情報玉手箱」の運用を継続したほか、②知床連山等バックカントリー情報の多言語化とリーフレットの活用を進めました。

2. 交通システムに関する研究と提案

野生動物との軋轢を解消し、より魅力的な公園利用のあり方として交通サービスのあり方を検討しました。今年度は、マイカー規制等のあり方を検討する「カムイワッカ部会」を「幌別以奥の自動車利用の適正化」を取り扱う協議体として実質的に改組し、交通システムに関する地域協議の場として整理しました。

3. 知床五湖地区でのキャンペーンと広報

知床五湖では、地域住民に五湖を身近に楽しんでもらうため、「知床五湖ローカル割引キャンペーン」を継続して実施しました。今年度は斜里・羅臼の両町民に対し、通年で地上遊歩道を無料で楽しめるサービスに加え、有料駐車場の駐車料金も無料としました。地上遊歩道での認定手数料免除の適用は 314 名となり、初目標の 300 名を超える結果となりました。また、駐車料金免除の適用も 240 台と当初目標を上回る実績となりました。

VIII. 知床五湖関連業務（受託事業）

2011 年より開始した知床五湖の利用調整地区制度は 9 年目を迎えました。知床財団は制度運営の要となる指定認定機関(環境大臣指定)として制度全体の運用を担っています。本年度は、全期間を通じて 65,021 名の認定数となりました。ヒグマ活動期の実績も好調で、特に 5 月から 6 月のガイドツアー参加者が大幅に増加しており、期間中は約 16,000 人の利

用者がガイドツアーに参加し、9年連続での増加となりました。

本年度も知床五湖登録引率者の養成研修と登録試験の運営を担当し、登録引率者の技術の維持・向上と、新たに登録引率者を目指す新規養成者が円滑に研修を実施できるようサポートを行いました。

2017年より継続して行われている利用適正化計画改定実験の運営を本年度も担当し、アンケート調査やモニタリング調査等の各種データ収集を行いました。また、利用調整地区制度の運用のあり方を協議する場である「知床五湖の利用のあり方協議会」の運営事務を行いました。3年間の社会実験と協議の結果、利用適正化計画の第3期計画が合意され、2020年度からは新計画での運用を行うこととなりました。

IX. 住民講座補助業務（受託事業）

2011年より継続的に実施している環境省事業「知床世界自然遺産地域における住民向け普及啓発講座補助業務」を今年度も実施しました。この事業は、地域住民が知床の自然に興味関心を持ち、保全活動に自ら参加する意識を向上するために実施しているものです。今年度はエゾシカ肉をテーマにした料理教室や、羅臼と斜里両町で同時開催したヒグマと人の軋轢を減らすためのゴミ拾い活動のほか、冒険家の関野吉晴氏をお招きした講座を実施しました。

公 4：森林再生系事業

I. しれとこ 100 平方メートル運動地における森林再生業務 (受託事業)

斜里町主催「しれとこ 100 平方メートル運動」は 1977 年の開始から 42 年、「100 平方メートル運動の森・トラスト」として原生の森の再生に向けた取り組みを始めてから 22 年目を迎えました。2019 年度は、新たに定めた 20 年間の目標や計画に基づき、森と生態系の復元、運動の普及に関する取り組みを進めました。この息の長い取り組みの中で、知床財団は、100 平方メートル運動に関わる現地業務を担っています。

1. 森林再生推進業務

森林再生作業

春から秋にかけて、苗畑での除草や苗木の根づくり、樹高 6 メートル以上の大型苗の移植、老朽化した防鹿柵の補修などの作業を行いました。それらの作業は全て多くのボランティアの皆様にお手伝いをいただきながら進めました。

また、アカエゾマツ造林地の密度調整作業を本格的に開始しました。これは、過去に植栽したアカエゾマツが樹齢 30 年以上を迎え、鬱蒼とした変化のない森となってきたことから、重機を使って一部の木々を伐採し、造林地の中に知床にもともとある木々が入り、多様な森へと変化させていくことを目的とした作業です。

近年、運動地の一部では、エゾシカ捕獲の効果によるシカの生息密度の低下が見受けられ始めています。これまで防鹿柵の設置や樹皮保護ネット巻きなどシカ対策に多くの労力を費やしていましたが、これからはこれまでできなかったササ地や造林地での森づくりを進めていく計画です。

生物相復元

運動地内を流れる岩尾別川では、かつて生息していたサクラマスを復元する取り組みを進めています。これまでの 20 年間（一時中断期間あり）、地元漁業関係者の協力を得て卵の放流を継続し、毎年海から戻ってくるサクラマスを確認する調査を行ってきましたが、その結果は、数尾程度という状況が長く続いていました。しかし、ここ数年間は二桁となる 10 尾以上のサクラマスを確認するようになり、この夏も 15 尾の魚の姿を確認しています。今後も経過を観察する必要がありますが、開始から 20 年を経て、岩尾別川でも復元への兆しが現れ始めています。今後も岩尾別川の環境改善を進めていくため、これらの結果や現在も残存している岩尾別川のダム状況などについて、世界自然遺産地域内の河川管理検討する河川工作物アドバイザー会議にて報告を行いました。

しれとこの森交流事業

森づくりの現場と運動参加者をつなぐ交流事業では、「第 40 回知床自然教室」(8 月 1 日～7 日、参加者 47 名)、「第 23 回しれとこ森の集い(植樹祭)」(10 月 20 日、参加者 96 名)、「第 24 回及び 25 回森づくりワークキャンプ」(5 月 15 日～19 日、参加者 6 名／10 月 30 日～11 月 3 日、参加者 9 名)の企画・運営を行いました。

知床自然教室は、知床の自然や 100 平方メートル運動を次世代に引き継いでいくために 1977 年に始まりました。これまでのべ 1800 名以上の子どもたちが参加し、現在では親の世代となった元参加者の子息も多く参加しています。40 回目の節目を迎えた 2019 年度には、自然教室 OB、OG や運動を支える多くの方々に向けたイベント「知床への回帰」(10 月 18 日～21 日、参加者 31 名)を開催しました。

森林再生専門委員会議運営

森づくり作業の方針や計画は、動植物の専門家と地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議の場で議論が行われその方向性などが定められています。

森づくり開始から 20 年目の節目となった 2017 年度には、次期 20 年間の目標と計画について議論を重ね、「森・川・人」をテーマに森づくりや生物相復元、そして運動地公開を進めていく「第 2 次中期方針(2018～2037 年度)」を策定しました。

今年度の会議では、新たな試みとして進めているアカエゾマツ造林地の密度調整作業の現場などを視察したほか、新たな 20 年間の 2 年目となる取り組みの結果報告を行いました。

運動地広報企画

100 平方メートル運動の広報誌『しれとこの森通信 No.22』(A4 判カラー16 ページ)の企画・編集作業を行いました。運動ホームページでは、動画サイトなども活用し、日々の作業状況を発信するとともにイベントやボランティア募集の媒体としても活用しています。

Ⅱ. しれとこ 100 平方メートル運動に関わる普及推進及び調査事業 (独自事業)

本業務は、斜里町主催「100 平方メートル運動の森・トラスト」の安定的な継続と発展を図るため、運動地を含めた運動の普及と推進に、運動の現地業務を担う知床財団が斜里町と連携を図りながら独自事業として取り組んでいるものです。

1. 森・川・人プロジェクト

新たな 20 年間の森づくりの一環として、重機を用いたササ地の書き起こし作業を行っています。これは、掻き起こすことでササの勢力を弱め、これまでササ地だった場所に新たな木々の更新を促すことを目的とした作業です。また、シマフクロウなどの希少鳥類の

分布動向に関するモニタリングや河川生態系に影響を与えているアメリカミンクの分布を把握する調査も行いました。

「しれとこ森づくりの道」の開設運営を行いました。知床自然センターを起点に旧開拓家屋や開拓小屋を巡る「開拓小屋コース」は、春からスノーシューを利用する積雪期も含めて通年での運用を行い、2,319 名の方に利用していただきました。その他、「シカ柵コース」や冬期のスノーシューコースの開設と運営も引き続き行いました。

知床自然センターでの運動普及に向けた取り組みとして、斜里小学校や斜里高校などの教育機関の受け入れを行い、教室での授業だけではなく、実際に運動地を歩き 100 平方メートル運動の取り組みや開拓の歴史について紹介しました。

合宿形式の森づくりイベントでは、ダイキン工業株式会社様の社員ボランティア（9 月・2 月）を開催し、それぞれ 10 名前後の皆様が、知床の森を訪れ、実際の森づくりに関わっていただきました。その他、新たな試みとして、7 月には、100 平方メートル運動を応援していただいている各支部の皆さんを対象したワークキャンプを開催し、参加者 9 名の皆さんと自然教室のキャンプ地にツリーデッキを建てる作業を行いました。

収 益 事 業

収 1：収益事業

I. 販売・有償貸出業務

知床財団の活動を広く知ってもらうことを目的に、オリジナル商品の開発を行いました。2011年から続いている株式会社フェニックスとのコラボレーション商品、オリジナルTシャツは、2018年に一新したデザインで今年度は計1,000枚製作しました。同シリーズで2020年販売に向けた新しいデザインの製作も並行して進めました。そのほか知床財団オリジナルのマスキングテープを2種作成、販売しました。さらに、知床財団の法人特別会員のワイエスインターナショナル株式会社ともコラボレーションし、都心部で大人気のフェールラーベン「KANKEN」バッグに知床財団ロゴワッペンを取り付けて限定販売し、特に賛助会員の方に人気でした。

オンラインショップ「コムスプリ」の売り上げは昨年度に続き好調で、約140万円の売上がありました。卸販売は、北こぶしグループでの取り扱いを中心に昨年比115.8%という実績でした。

知床自然センター、羅臼ビジターセンターおよびルサフィールドハウスで、ヒグマ撃退スプレーとフードコンテナの有料貸出を行いました。今年度は、ヒグマ撃退スプレー448件（前年度473件）、フードコンテナ39件（前年度36件）を貸出しました。貸出の際には、契約内容や使用方法、ヒグマとの危険な遭遇を回避する方法について写真を用いて理解しやすいよう配慮した資料などを作成、利用し、10分程度のレクチャーを行いました。

知床自然センターで長靴・双眼鏡の有料貸出を実施し、長靴3,118件（前年度3,376件）、双眼鏡233件（前年度251件）の利用がありました。また冬季におけるスノーシューの貸し出し実績は686件（前年度1,163件）となりました。昨年度より追加したポールの貸し出しは71件（前年度163件）の貸出がありました。羅臼ビジターセンターにおける長靴のレンタル業務では68件（前年度79件）の利用がありました。

2019年度の販売売り上げは35,383,930円（前年度24,535,680円）、レンタルによる売り上げは2,579,200円（前年度3,025,000円）となりました。

クレジットの利用率も昨年からさらに増加しており、年間の店舗売上金額の31%がクレジット利用によるものでした。

II. 研修実習受入業務

道内外の各種団体から依頼された講演、レクチャー、行政視察、執筆等に対応することにより、知床の価値を紹介、または、知床財団の持つ野生動物保護管理や調査研究、公園管理、環境教育のノウハウを広く提供・共有する活動を行いました。2019 年度は 57 件実施し、3,529,953 円の収入がありました。

他 1：その他の事業

I. JBN 業務（受託事業）

日本クマネットワーク（JBN）からの受託業務として、JBN 会員向けニュースレター「Bears Japan」の発送、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」の発行・販売、JBN ホームページの運営管理を行いました。年 3 回発行の JBN 会員向けニュースレター「Bears Japan」は会員や関係機関に、のべ 1,057 件発送しました。また、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」については、店頭および通信販売を通じて計 51 部を販売しました。ホームページについては、日常的な掲載内容の更新を JBN 事務局と連携して実施しました。

日本クマネットワークは、個人や地域ごとの単独の活動だけでは難しい全国レベルの諸問題や国際問題に関し、必要に応じて社会に対して働きかけを行い、人とクマのより良い関係を構築する活動を行っている NGO 組織です。近年は、クマによる人身事故対策や絶滅の恐れのある四国のツキノワグマ個体群の保全活動に精力的に取り組んでいます。会員は専門家やクマに関心を持つ一般市民、およそ 360 名で構成されています。

法 人 会 計

法 1：財団法人管理運営事業

I. 財団法人管理運営業務

理事会については、第 1 回理事会（5 月）は「2018（平成 30）年度事業報告及び決算報告並びに監査報告、定時評議員会に提出する役員（理事）候補者名簿、定時評議員会の招集、臨時評議員会の招集、賛助会員入会承認」について審議しました。第 2 回理事会（10 月）は、「賛助会員入会承認」について審議しました。第 3 回理事会（12 月）は、「賛助会員入会承認」について審議しました。第 4 回理事会（3 月）は、「2020（令和 2）年度事業計画（案）、収支予算（案）、資金調達（短期借入金）の限度額の設定、給与規程の一部改正、賛助会員入会承認」について審議しました。第 5 回理事会（3 月決議の省略）は、「事務局長の選任」について審議しました。

評議員会については、定時評議員会（6 月）は、「2018（平成 30）年度事業報告及び決算報告並びに監査報告、辞任に伴う後任役員（理事）の選任」について審議しました。臨時評議員会（6 月）は、「評議員長の選定」について審議しました。